

古典教育の奨め

長い間小学校で愛唱されて来た歌「我は海の子」が、難しい言葉が多いといふ理由で削除されてしまったと聞いた。以前にも、「春の小川」の歌詞がやはり難しいといふ理由で、「さらさら流る」が「さらさら行くよ」に改められた事があった。その時にも、私は、「小川はさらさら行く」とは何といふ表現かと、腹立たしい思ひで一杯だった。

既に述べたやうに、難しい言葉を嫌ふのは成長の止まった大人だけであって、子供たちにはそれに触れるのが楽しいのである。子供たちは未知の言葉に触れて成長するのであって、知ってある言葉だけに接してゐたら進歩は無くなってしまふ、とんでもない思ひやりである。

昔の学者、近くは吉田松陰、橋本左内といふやうな人は、三・四歳の頃から古典を読み、十歳ともなれば、私たちを感動させるやうな詩文を作つてゐる。然しながら、人々はこれを生れつきの天才だと言って、その一言でこれを片づけてしまつてゐる。確かに、長い間、知能は生れつきであつて、生後の教育でこれを変へる事は出来ない、と考へられて来た。ところが、大脳生理学などの諸科学が著しく進歩して、知能は幼児期の頭脳への刺戟によって作られるものである、と考へるやうに変わったのである。

そこで、私は、昔の学者や松陰は、生れつき頭が良かったから三・四歳で古典が読めたのではなくて、三・四歳といふ幼児期に古典を読んだので頭が良くなったのではないかと考へ、私の研究所(八王子市めじろ台、石井教育研究所)に来てゐる三・四歳の幼児に漢文の『孝経』を教へてみる事にした。

この子供たちは、一週間に一日、それも僅か五十分間の学習時間しか与へられてゐないので、『孝経』を学習する時間は二十分位しか無い。だから、一回の学習は凡そ一ページ位のものである。文意を簡単に説明して聞かせ、その後一節づつ私が読んだ所を子供たちに復唱させる、と言つた指導をする。

子供たちがどんな反応を示すか、その結果は甚だ心配であつたが、子供たちの反応は意外な位良かった。次の週に、子供たちに学習した所を読んでもらふと、どの子もすらすらと読むのである。

あとで親たちに聞いてみると、毎朝、子供たちは起きると直に『孝経』の本を取り出して来て、大きな声で朗々と読むのださうである。

母親にも父親にも読めない本が読める、といふ事で親たちが心から驚嘆する。それが子供たちにとっては何よりも嬉しいらしくて、繰返し繰返し読むらしい。そんな事で、『孝経』以外の学習を含めて一週間に僅か五十分の学習であつたが、十か月もすると『孝経』全巻を読み終へて

しまひ、巻頭から巻末まで、どこを読ませてみてもすらすらと読めるやうになってしまった。専門課程の大学生でもがうは読めるやうには先づならない。

私の研究所では、決して良い子ばかりを選んで教へてみるのではない。どちらかと言ふと、頭の働きが普通より鈍い子供もある。それでも立派に『孝経』が読めるやうになったのである。この試みにより、「松陰でなくても、三・四歳になれば、『論語』や『孝経』が読める」といふ事が証明されたわけである。

『孝経』を終へると、次には『論語』をやることにした。『論語』は、『孝経』に比べると短かくまとまってゐるのでやり易い。私の指導は、“素読”ではなくて“講読”である。どこまで解るか、私にも全く解らないけれど、とに角、字句の解説がら全文の意味内容に至るまで、大学で大学生に対する時と同じやうにやってみたのである。

私が、こんな指導をしてゐると言ふと、「幼児に『論語』が解るわけが無い。無駄な労だ」といふ意見がよく返って来る。では「いつになったら理解できるか」と私は反問する。谷川徹三先生の御本に「一高で安井先生(伝来の大儒、息軒先生の孫、小太郎先生)の『論語』を拝聴して初めて『論語』の素晴らしさに感動したが、その後十数年して『論語』を読んでもみると、解つてゐたつもりが真の理解ではなかつた事を知つた。それ

からまた数十年経つた今、『論語』を読んでもみると、またまた前の理解が真の理解ではなかつた事を思ひ知らされる」といふ意味の事が書かれてあつたと記憶してゐる。

『論語』とは、このやうに人間の成長につれて理解が深まって行く書物である。二十歳の時には二十歳なりの理解があり、四十歳の時には四十歳なりの理解があり、六十歳になれば六十歳なりの理解があるやうに、幼児には幼児なりの理解があつて然るべきものだとは私は考へてゐる。また、山本七平氏が、「『論語』が本当に理解できるのは四十歳を過ぎてからであらう。だから、解らない事が覚えられる幼児期に学ばせるのが良い」といふ意味の事を何かに書かれてゐたが、全くその通りだと私は思ふ。

然し、先に「幼児には幼児なりの理解がある」と言つたけれども、今、『論語』を学習させてゐる幼稚園の園長さんから次のやうな話を聞いた。ある母親が子供を連れて電車に乗り、友達の婦人と大声で談笑してゐると、子供が母親の袖を引いて、「車に升りては正しく立ちて綏を取る。車中にては内顧せず、疾言せず」と言つたさうである。母親には何の事だかさっぱり解らない。そこで子供に尋ねたところ、これは『論語』にある言葉で、車に乗つた時にはわき見をしたりおしゃべりしたりしないやうにしなさいといふ事だ、と母親に説明したと言ふ。母親は恥かしいやら

嬉しいやら、複雑な気持だったが、この事を園長に報告して感謝したといふ話である。

この話を聞けば、『論語』にも幼児に立派に理解できるものがあることが解る。「車に乗ったらわき見したりおしゃべりするな」といふよりも、「車に升りては内顧せず疾言せず」と教へた方が、心の奥深く滲み入って、実践につながるもののやうである。然し、幼児期や小学校における古典教育は、山本氏が言はれるやうに、四十歳を過ぎて役に立てば良いといふつもりで行った方がよいと思ふ。